

春日式土器をめぐる研究の現状と課題

松 永 真由美*

Some Problems of study on Kasuga-type Pottery

I. はじめに

南九州における縄文時代の土器編年は河口貞徳氏によってその大綱が^{註1)}確立され、現在多くの研究者がこれに従って当地域の考古学的研究を進めている。一方、近年の相次ぐ発掘調査やそれに伴う資料の増加、研究の進展に伴い、この編年案に対する若干の修正も行われつつある。春日式土器も現在、その時間的系統的な位置付けが揺れ動いている土器である。ここでは春日式土器に対する先学諸氏の見解を概観することによって、春日式土器研究の今後の課題を抽出したい。

II. 春日式土器研究の現状

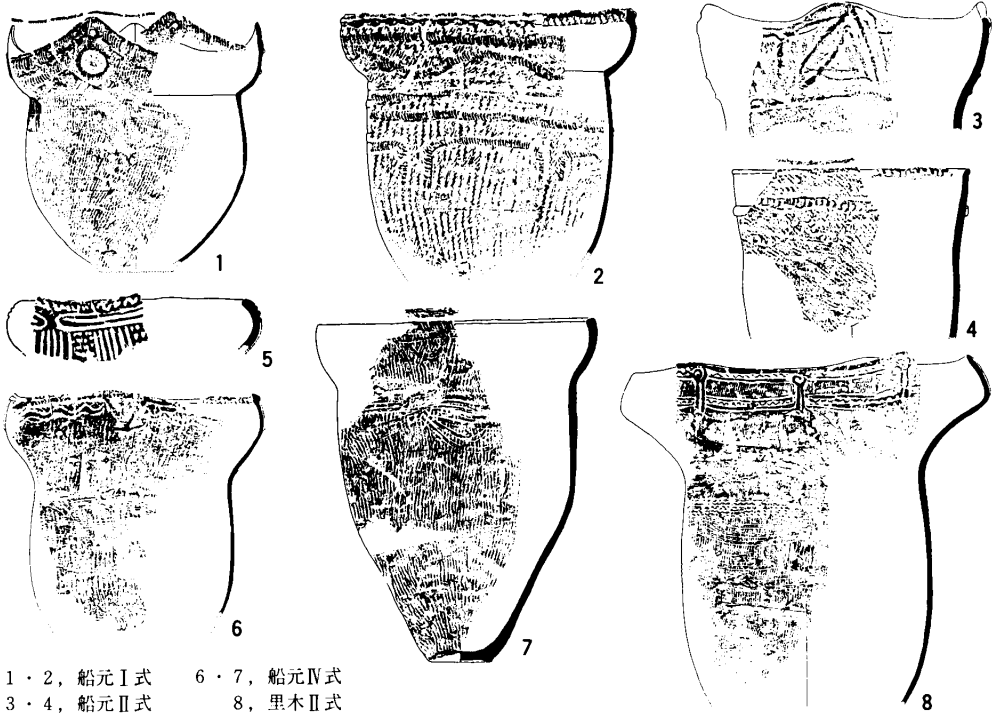
春日式土器は1962・1963年に三次にわたって調査された鹿児島市春日町遺跡第3層出土土器を^{註2)}標式とする土器である。調査担当者である河口貞徳氏によって命名された土器で、器形は胴部がやや張り頸部がわずかに締まり、口縁部は外開きから内湾するキャリパー状を呈する。また、底部は上げ底である。器面調整に貝殻条痕が施されるものも多い。文様施文も、沈線文・突帯文・刺突文・粘土紐貼り付け、或はそれらの組み合わせ等が用いられており、バラエティーに富む土器である。

河口氏は春日町遺跡の発掘で縄文時代中期に位置付けられる並木式土器・阿高式土器出土層より春日式土器が下層から出土したこと、^{註3)}穎娃町北手牧遺跡では縄文時代前期後半に位置付けられている深浦式土器の上層から出土していることから、春日式土器を縄文時代前期終末に位置付けた。また、「南九州の前期の主な流れをなした融合文化は春日式土器で終わる」と述べ、春日式土器の^{註4)}出自を在地の土器系統の中に求めている。

その後、近年に至り、春日式土器が施縄文の土器と出土する例がみられたり、その形態的特徴である口縁部が内湾キャリパーを呈するという点から、縄文時代中期に瀬戸内地方を中心に分布する船元式土器^{註5)}（第1図）との関係が言及されることとなった。長野真一氏は、「（春日式土器の）発生する要素は南九州では認められず、瀬戸内系土器の波及が南九州に及んだ結果」であるとし、「キャリパー状の器形をもつ土器群はかなり完成された状況で伝播してきたことがうかがえる土器文化^{註6)}であると述べている。また、時期的にも河口氏の位置付けた縄文時代前期終末より下るものであることを示唆した。

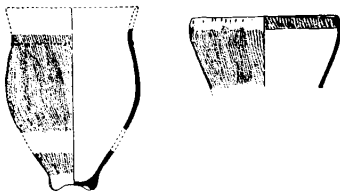
一方、田中良之氏は縄文時代中期に阿高式系土器分布圏と船元式系土器分布圏に九州が分けられる^{註7)}ことを示し、春日式土器や熊本県にみられる竹崎式土器（第2図）について、船元式土器が在

*鹿児島市城山町1番1号 鹿児島県立博物館

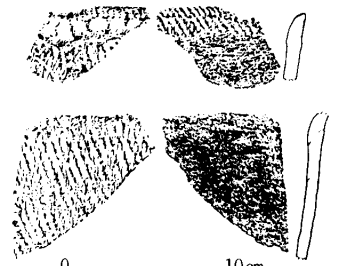


1・2, 船元Ⅰ式 6・7, 船元Ⅳ式
3・4, 船元Ⅱ式 8, 里木Ⅱ式
5, 船元Ⅲ式

第1図 船元式土器 (縮尺不同, 註5)文献による)



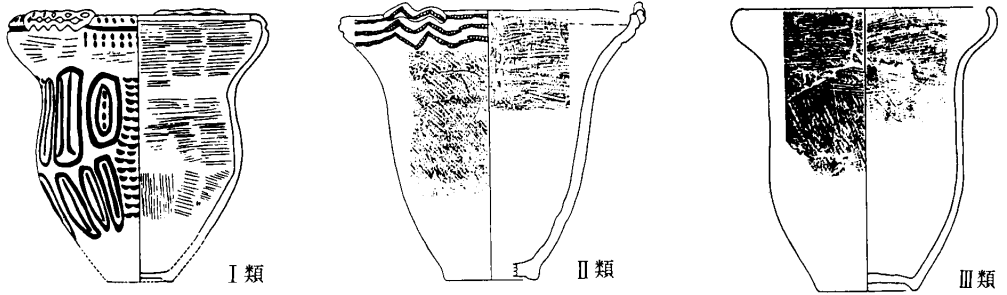
第2図 竹崎式土器
(縮尺不同, 註8)文献による)



第3図 船元Ⅰ式土器
(註11)文献による)

化したものであるという見解を述べている。さらに進んで氏は、それらがなぜ船元式土器と呼ばれなかったかについても、分布の中心である岡山県から「西へと離れるにつれて土器製作に関する情報が次第に欠落して行き、結果として、中心地のものとは似ても似つかぬ土器^{註9)}」が作られてしまったからであるという考えを示している。

1985年、春日式土器を伴う住居址群が検出された前谷遺跡^{註10)}の調査においては、春日式土器と施縄文の土器が同一住居址から出土し、さらに春日式土器の包含層から船元Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式あるいは里木Ⅱ式に比定されそうな縄文・燃糸文の地文をもつ土器が出土した。調査担当の中村耕治氏はこのような状況と、鹿屋市榎木原遺跡^{註11)}においては船元Ⅰ式が出土している(第3図)こと、また揖宿郡山川町成川遺跡^{註12)}での春日式土器の出土状況及び前谷遺跡におけるC年代測定法の結果などから、春日



第4図 河口氏分類春日式土器（縮尺不同，註16文献による）

式土器は縄文時代中期に位置付けられることを明確に指摘した。また、先の河口氏説を進めた形で「縄文時代中期において深鉢の器形がキャリパー状を呈するという全国的な流れの中で、前段階の轟式・曾畑式の流れを汲みながら、瀬戸内・東九州から伝わってきた船元式文化と影響しあった形で春日式土器が生まれたのではないだろうか」との見解を示された。前迫亮一氏も榎木原遺跡の調査結果から「南九州，少なくとも大隅半島においては，船元式文化が波及していた^{註15}」ことを考え，春日式土器の成立に何らかの影響を与えたことを示唆した。また，河口氏も新たな見解^{註16}を示し，春日式をⅠ類（口縁部に隆帯文，口縁部以下に凹曲線文を施す土器）・Ⅱ類（口縁部に隆帯文を施す土器）・Ⅲ類（素文土器）という3類に分類した（第4図）。そして，時期については縄文時代前期末～中期初頭に位置付け，船元式土器文化の伝播は縄文時代前期末から中期初頭にかけて瀬戸内地域から南九州への人々の移動があったことを示すものであると考えた。東和幸氏は，この河口氏の分類に対し，この分類が並存するタイプとしての分類ならば沈線だけをもつ土器の位置付けがなされておらず，時間を考慮しての分類ならばⅠ～Ⅲ類，特にⅢ類の素文土器が独立している事例が見い出されないことをあげ，さらに検討を要することを示した。氏も春日式土器と船元式・里木式土器との関連性を指摘し，瀬戸内地方の土器を基準にして，春日式土器の編年を組み立てる方向を示した。氏は春日式土器の変遷のある程度の傾向として，向かいあった波状文を最初は隆帯で作っていたものが次第に崩れ，また隆帯から沈線に転じ，しかも向かいあった波状文であったものが徐々に平行した波状文に変化することを予想した。また，沈線文については，最初貝殻刺突であったのが連続刺突からさらに沈線内刺突に変化することを予想している。しかし，これは氏自身も述べているように，現段階では共伴することが多く，明確には区別できない。東氏は大根占町轟木ヶ迫遺跡^{註17}の調査を通じて，同遺跡においては縄文・燃糸文施文土器が一片も見い出せないことから，船元Ⅰ式～里木Ⅱ式の時期にこれらとの接触がなかったと考えた。また，他の遺跡では胴部まで伸びる文様がみられるのに対し，ほとんどの文様が口縁部に集まる傾向があること，太目の突帯をもつ土器の量が多く，底部も上げ底よりやや張り出すものが多いなど，同遺跡出土の春日式土器を春日式土器の中でも後半の時期に位置付け，これらの特徴を持つ土器は大平式土器や縁帯文土器系統に続くと考えている。出自については船元Ⅰ式・Ⅱ式との影響を考えるには差が余りにも大きいと考え，新たに深浦式土器（縄文時代前期後半に位置付けられている）が船元Ⅰ式・Ⅱ式に関連するのではないかとの見解を示している。

Ⅲ. 「春日式」の問題点と課題

前節で概観した春日式土器研究の現状から、主に次の三点が問題点としてあげられる。

- ① 春日式土器の時間的位置付け
- ② 春日式土器の系統
- ③ 春日式土器の時間的变化

①については河口貞徳氏のみがその上限を縄文時代前期末に求めているが、大勢は縄文時代中期に位置付ける見解に落ち着きつつあり、先述の中村耕治氏の様々な視点から検討されている結果等からみても、縄文時代中期という時間枠内で位置付けられることはほぼ確実であろう。

②については、大別して二つの見解が存在している。一つは「春日式」と「船元式」を一応概念的に同じレベルの型式として把握し、その上で、両者間の関係を考える立場である。この立場に立つ場合、春日式はあくまでも船元式とは別型式の土器であり、南九州在来の土器型式が船元式の影響を受けた結果出現した土器という評価が与えられることになる。この見解を立証するためには、南九州在来の土器型式の中に春日式土器の母胎となり得た土器型式を確定することが必須の課題であろう。一方、春日式土器の評価を行うにあたり、汎西日本的な土器群の在り方をおさえつつ、南九州在来の土器群にキャリパー形の器形が無いということから、「春日式」と従来呼ばれてきたものは、大きくとらえるならば「船元式」の範疇に含められるとする立場がある。この見解に従った場合、縄文時代中期には南九州東半部のある部分まで船元式土器の主体的な分布圏が広がっていたことになる。そして、春日式はいわば「南九州型の船元式」とも言うべき存在として評価されることとなろう。また、この見解について付け加えるならば、このような存在を示す土器が成立した背景、及び現代の研究者がこれらの土器を船元式土器とは別型式の土器として認識してきた事情については、先述のように田中良之氏によって非常に合理的な説明がなされているのである。

③の問題は②の解決に対して重要な鍵を握っているものと考えられるが、前節で概観したように、春日式土器の分類はやっと2・3の見解が示されたばかりであり、またその際に示された変異相互の関係についても不明瞭なままである。

縄文時代中期の九州は、在地型である阿高式系土器が西北九州を中心として、瀬戸内系の船元式土器が東九州を中心としてそれぞれ分布しているが、両者は地理的に分布を接しつつ両者間に交流はあってもそれぞれの土器文化の伝統は固持しており、両土器型式の中には互いの影響が見られないことを田中良之氏が「中期・阿高式系土器の研究」や「土器からみた文化交流」等で明らかにしている。これまで、南九州における縄文時代中期は阿高式系土器分布圏に含まれているものとして理解されてきたが、新たに「春日式」が中期に位置付けられることによって、南九州の中期における様相は見直しの必要に迫られてきた。具体的に述べるならば、例えば、並木・阿高式土器と春日式土器との関係・並存の在り方などが問題となろう。この問題の解決にはその前提として春日式土器の系統的な位置付けを明らかにすることが必要であるが、例えば、春日式が船元式の地方型としてとらえることができるならば、南九州における春日式土器と阿高式系土器との関係が、田中氏が明らかにしたような船元式土器と阿高式系土器との間に汎九州的に認められる在り方と様相を同じ

くするか否かということがまず問題となろう。このような観点に立つならば、滑石を胎土に混入する春日式土器の存在等も改めて評価し直す必要があるだろう。

春日式土器に関してはその系統的時間的位置付けを巡って多くの見解がみられたが、その時間的位置付けがほぼ縄文時代中期に落ち着いた現在、さらに進んでその系統的位置付けを明確にし該期に並存する阿高式系土器との関係を明らかにすることは、縄文時代中期の南九州地方の地域的特色を明らかにするための有効な手段となろう。

註

- (1) 河口貞徳『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 1980年 鹿児島県教育委員会
- (2) 河口貞徳・河野治雄「鹿児島市春日町遺跡」『鹿児島県考古学会紀要』4 1964年 鹿児島県考古学会
- (3) 河野治雄・川辺信夫「北手牧遺跡」『穎娃町郷土誌』 穎娃町 1975年
- (4) 河口貞徳「春日式土器」『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 1980年 鹿児島県教育委員会
- (5) 現在、瀬戸内の縄文時代中期土器編年は間壁忠彦氏によって整理されたものが、最もよく使われている。小稿で取り扱う船元式土器もこれにならうものである
間壁忠彦・間壁菫子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7 1971年 倉敷考古館
- (6) 長野真一・戸崎勝洋・富田逸朗・成尾英仁『大畝町園田遺跡』 1985年 宮之城教育委員会
- (7) 田中氏以前にも、このことは前川威洋氏によっても指摘されている
前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」『古代文化』21—3・4号 1969年 古代学研究会
田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6 1979年 九州古文化研究会
- (8) 乙益重隆「縄文文化の発展と地域性—九州西南部」『日本の考古学』1965年
- (9) 田中良之「土器からみた文化交流」『文明のクロスロード MUSEUM KYUSYU』24号 博物館等建設推進九州会議
- (10) 吉永正史・中村耕治『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財調査報告書(1) 1986年 松山町教育委員会
- (11) 弥栄久志・前迫亮一・成尾英仁・浜崎通『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)1987年 鹿児島県教育委員会
- (12) 出口浩・繁昌正幸『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24) 1983年 鹿児島県教育委員会
- (13) 成川遺跡において、春日式土器の包含層は池田湖火山灰層の直上に位置している。成川遺跡の調査が行われていたときは、池田湖火山灰の年代はV.B.P. 3500~4000年であったが、現在ではB.P. 5000~5500年と修正されており、成川遺跡出土春日式土器はこれより古くなることはない
- (14) 前谷遺跡におけるC年代測定値
春日式土器出土2号住居址 Y. B. P. 4010~90年
春日式土器包含層中の木の実 Y. B. P. 4100~90年
Y. B. P. 4040~90年

- (15) 註(11)に同じ。
- (16) 河口貞徳『日本の古代遺跡—鹿児島』1988年 保育社
- (17) 戸崎勝洋・東和幸・成尾英仁『轟木ヶ迫遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1988年
大根占町教育委員会
- (18) 田中良之氏はこのような状況は「社会集団とその文化が健全である場合の交流と土器様式のあり方をしめす」モデルとして呈示されている。